

中国における高齢者の主観的幸福感

—嘉峪关市と深圳市の場合—

雷 秀雅*・堂野佐俊

Subjective Well-Being on Chinese Aged Person
—Cases in Jiayuguan and Shenzhen Cities—

Xie-ya LEI*・Satoshi DOHNO

(Received September 30, 2006)

1. 問題と目的

現代社会においては、人口の高齢化という現象が大きな社会問題の1つとなってきた。こうした問題に関しては多くの側面から関心が注がれているが、特に、高齢者の生活と心身の健康、パーソナリティの発達的特徴、生活の質と経済的背景、地域やコミュニティの問題、文化・社会的変化との関係など、21世紀を迎えた今日の現代的課題として、学問の領域を越えて取り上げられることが多くなってきた。

一般に、高齢期は、人生を支えてきた心身の健康、経済的基盤、社会的つながりなど多くの面での喪失といった人生の一種の危機に遭遇し、「自分の生存の意義・価値」が最大の関心事となる時期である。社会が複雑多様に変化を続け、価値観の確立が困難といわれている今日においては、人生の指標ともいえるような「生きがい」に直結する主観的幸福感の検討は、高齢化社会が進展すればするほどますます重要性を増す問題となってきた。特に、生涯発達の観点に立つとその意義がより深いものとなってくる(堂野・堂野、2000)。

中国においても高齢化の傾向は例外ではなく、中国国家统计局人口司によると、1999年には60歳以上の人口が総人口に占める割合は10%にも達し、2000年には65歳以上が7%に達したことが報告されている。中国も本格的に高齢化社会の仲間入りを果たしたことになる。こうした変化は、人口構造の転換を示すとともに、社会、経済、科学技術、医療保健事業の変化をももたらすものであり、国民のライフスタイルの変化を示すものである。

高齢者に関する研究としては、1960年代以降の米国における高齢者の「主観的幸福感」(subjective well-being)という概念に着目した検討が主流をなしており、高齢者の社会統合、老化への適応(successful aging)の条件の追求といった研究が中心であった(和田、2001)。以来、高齢者の主観的幸福感に関する研究は、いわば老年学の中心的課題の1つとさえいえるような存在となってきた。

「幸福感」測定のための尺度の開発や因子構造に関する研究は、Neugarten, B.L., *et al.* (1961) の LSI-A (Life Satisfaction Index A) 及び Lawton, M.P. (1975) の PGC (Philadelphia Geriatric Centre) などを用いた老人の生活満足度、モラール、幸福感など

*北京農林大学・心理学科

の側面に関するものが先導的役割を果たしてきた。日本においては、これら欧米の研究の影響を受けつつ、老人の主観的幸福感を指標とした研究が取り上げられ、新しい尺度の導入や開発を目指した検討が進められている（和田，1981；古谷野ら，1989）。こうした研究から、主観的幸福感を規定する要因として、年齢・性といった基本的属性、主観的健康感、社会経済的変数や活動性といった心理・社会的レベルなど、さまざまな関係変数が報告されている（浅野ら，1981；藤田ら，1989；谷口ら，1984）。

中国は、儒教などを背景とした思想の流れにみられるように、伝統的に敬老精神の強い国であり、高齢者の幸福については、当然ながら強い関心が寄せられてきた歴史がある。

中国の儒教においては、幸福観は基本的には倫理的な側面から評価されてはいる。しかし、現実には他者の主観的幸福感はそれほど配慮されていない側面もあると考えられる。こうした観点もあり、今日の中国では、主観的幸福感に関する研究はまだ多くないというのが実態であろう。特に、「PGC. モラル・スケール」や「自己満足度」などを用いた主観的幸福感に関する研究は皆無に等しい。

高齢者に対する関心は、今日では物理的・経済的な支援の枠組みのみに止まらず、高齢者の心身の健康にとって有益な新たな生活環境の創造と構築に向けられている。そのため、高齢者との関わりは家族も地域も社会も、また高齢者自身も一体となって大局的な見地から進められようとしているのが現状であろう。現代のような高齢化社会における老人の幸福は、幸福度を高めるために高齢者本人や他者（社会及び家族など）の努力をも生み出してきている。観点を調べてみれば、そのような状況にあることは、一方では高齢化社会の生み出す新しい可能性となっているとも考えられる。このような見地に立脚して研究を展開しようとするならば、高齢者の主観的幸福感に取り組む高齢者自身の生活態度と社会・家族環境との関連について分析することにより、現代における高齢者の主観的幸福感とその関連要因の関係について明らかにすることができると考えられる。

本稿では、中国の内陸部甘粛省嘉峪関市及び沿海部広東省深圳市に在住する高齢者を対象として調査を実施した。本研究によって得られた中国の高齢者の主観的幸福感の実態とその関連要因について検討を加え、中国における高齢化社会の中で彼らの幸福感がどのように形成され、どのように機能しているかに関する示唆が得られるものと考えられる。

2. 方法及び手続き

<研究の枠組>

近年、人間の生活について考える上で、「生活の質（QOL）」という概念が用いられることが多い。幸福な老いのプロセスに関する研究においても、このような観点からのアプローチは例外ではない。こうした先行研究の中には、日常生活の様々な領域、特に対人関係や家庭生活、健康状態、経済状況などの客観的な状況が現在の主観的幸福感を直接的に規定することを主張するようなものあり、また、個人的要因に主観的幸福感に対して効果をもつとするような研究もある。こうした背景の中で、人間の主観的幸福感を規定する要因のモデルの中に、客観的な状況要因だけでなく、個人要因を含めようとするような統合的アプローチが提唱されるようになったのである（井上，2003）。

本研究においては、従来の研究に基づき（Lawton，1975；前田，1975；古谷野，1984；森，1992；関根，2000）、これらの結果を検討し、客観的状況ばかりでなく、個人要因をも重視した要因モデルを設定することにした。

Fig. 1 に示すように、本研究においては、まず、主観的幸福感尺度（被説明変数）を作成し、幸福感の関連要因（説明変数）を設定した。また、幸福感に関する関連要因の設定においては、客観的要因として基本属性（性別、年齢）、健康要因、家族要因、経済要因、社会参加を取り上げた。さらに、個人的要因に関しては、情緒的要因（今後の不安）、態度要因（老人感覚）及び宗教感、趣味といった項目を設定することにした。その後、作成された主観的幸福感尺度について因子分析による因子構造を検討し、それぞれの因子と今回設定された各要因との間の関連性について検討した。

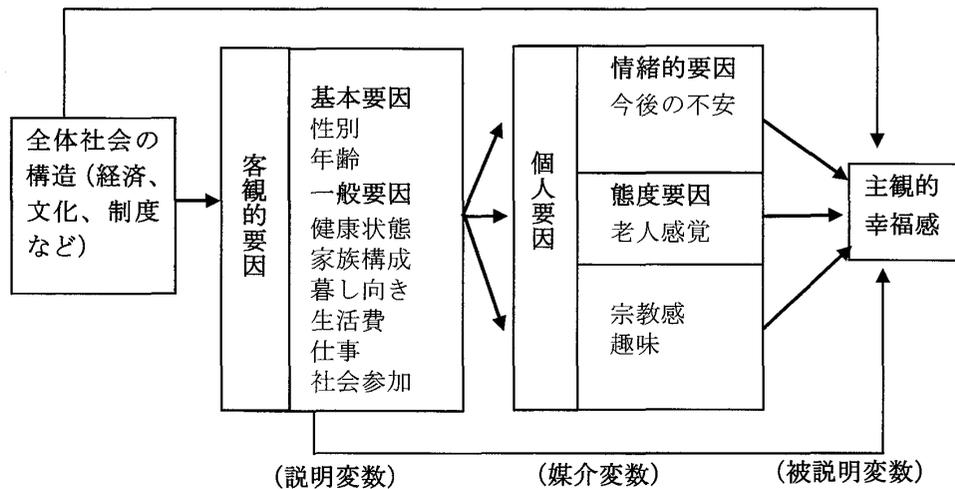


Fig. 1 高齢者の主観的幸福感の構造モデル

<調査地域と調査対象>

調査対象は中国の内陸部甘粛省嘉峪関市に住む高齢者（60歳以上）¹⁾ 343名と沿海部広東省深圳市宝安区に住む高齢者（60歳以上）270名、合計613名（有効サンプル）であった。調査は質問紙法により行い、調査時期は嘉峪関市においては2003年2～3月であり、深圳市宝安区においては2004年2～3月であった。

(1) 調査対象地域

嘉峪関市は、古代シルク・ロードの交通の要地であり、また明朝の万里の長城の西端の起点である。嘉峪関市は、1958年に中国の国家「一五（第一回5年計画）」重点建設項目の一つとされた「酒泉鋼鉄公司」の建設に伴って創建されてきた新しい都市である。したがって、嘉峪関市の経済構造は、鉄鋼事業が中心であり、次いで観光事業となっている。嘉峪関市の人口は約18万人であり、そのうち、「酒泉鋼鉄公司」の職員は3万人を占めている。また、公的に戸籍に登録されている60歳以上の高齢者は、市内の居住者全体に対して10.3%となっている（資料：<http://www.jyg.gansu.gov.cn>）。なお、今回協力を得た全調査対象者のうち約90%は「酒泉鋼鉄公司」の定年退職者である。

深圳市は、1980年代中頃から中国南部の「第一経済特区」として創建されてきた新しい都市である。2001年、電子産業と科学技術産業は深圳市の生産総額の56.3%を占めている。中国の第5回人口国勢調査（2000年）によると、深圳市の人口は約700万人となっている（これに含まれない外来の人口は多数といわれている）。その中で、戸籍に登録されている高齢者（65歳以上）の全市の人口に対する比率は7.8%である。

宝安区は深圳市の6管轄地域の中の1つであり、面積は712.92km²となっている。この宝安区の産業構造は、新技術開発産業、加工産業、観光事業の3つが大きな柱となっている。宝安区

政府の統計によれば、2002年末の人口は160.6万人であり、その中の戸籍人口は28.88万人、外来人口131.73万人である。(資料：http://www.baoan.gov.cn)

(2) 調査対象

Table 1 は、今回の調査対象者の内訳である。

Table 1 調査対象の内訳

		嘉峪関市 (N=343)	深圳市 (N=270)
年齢	前期高齢	69.6%	65.8%
	後期高齢	30.4%	34.2%
	平均年齢	67.3歳	70.2歳
性別	男性	60.8%	39.3%
	女性	39.2%	60.7%
家族構成	子と同居	36.3%	59.6%
	夫婦のみ	59.6%	31.6%
	1人暮らし	4.1%	8.8%

<質問紙>

主観的幸福感の関連要因として、年齢、性別、配偶者の有無、子どもとの同居状況、主観的健康度（4段階）、経済的安定度（3段階）、従来の職業、現在の就業状態（有・無）、社会活動（4段階）、趣味の有無、宗教の有無、老人感覚（自分を老人と思うかどうか）、今後への不安（4段階）の13項目をとりあげ、質問紙を構成した。

<高齢者の主観的幸福感尺度>

主観的幸福感尺度として本研究で用いたのは、Lawton (1975) の改訂版 PGC モラール・スケール及び横山 (1987) の多次元主観的幸福感尺度などから24項目を選定した。回答は5段階であり、それぞれ「全くそう思わない」を1点、「あまりそう思わない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「少しそう思う」を4点、「非常にそう思う」を5点とした。その際、逆転項目も含まれている。

3. 結果と考察

(1) 主観的幸福感の因子構造

主観的幸福感の測定にあたっては、一貫した理論や概念的規定が行われておらず、これまで研究者によって操作的にさまざまな尺度により試行が行われている。「モラール」や「生活満足度」、「幸福度」などはその例である。本研究においては、上記のような尺度を作成し、対象者613名からデータが得られた。これについて因子分析²⁾を行い、中国における高齢者の主観的幸福感の因子構造を明らかにした。因子分析においては、因子分析の初期解は主因子法であり、因子の回転方法はバリマックス法を用いた。固有値の減少傾向と因子の解釈可能性から24項目のうち18項目で5因子を抽出した。なお、この5因子で全体の分散の52.6%（累積寄与率）を説明している。結果は Table 2 に示すとおりであった。

これについて因子の解釈を試みた。主観的幸福感に関する第1因子は、「これまでの生き方や社会的役割に満足している」、「人に自慢できることがある」などの5項目で「生活満足」と命名した。第2因子は、「日頃の判断は、まちがいが少ない」、「これまで自分なりによくやってきた」などの4項目で「肯定的意識」と命名した。第3因子は、「困ったことがおこっても、何とかなる」、「現在の生活は、理想に近いものです」などの3項目で「楽観的態度」と命名し

た。第4因子は、「社会奉仕など何か役に立ちたい」、「仕事を続けていきたい」などの4項目で「前向き志向」と命名した。第5因子は、「若い人がうらやましい」、「年をとっていることが気になる」の2項目で「消極的態度」と命名した。

Table 2 主観的幸福感の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
人に自慢できることがある	0.8961	0.3027	0.2363	0.1329	-0.0469
これまでの生き方や社会的役割に満足している	0.6858	0.4134	0.2341	0.3152	0.0956
今までしてきたことで、自分としては満足している	0.6551	0.2548	0.3983	0.0799	0.0452
感謝されたり、敬われている	0.5443	0.3125	0.0441	0.1876	-0.1073
明日のことあれこれ思い煩わない方です	0.4982	-0.0297	0.1719	0.2112	0.1345
日頃の判断は、まちがいが少ない	0.1489	0.6498	0.1952	0.1432	-0.0529
これまで自分なりによくやってきた	0.1530	0.5923	0.0901	0.3192	0.0007
自分に自信を持っていることがある	0.3127	0.5763	0.1979	0.2997	-0.0256
これまで本当にやりたかったことがやれた	0.2399	0.4079	0.2145	0.2401	-0.0754
困ったことがおこっても、何とかなる	0.2996	0.1891	0.6827	0.0693	0.1048
現在の生活は、理想に近いものです	0.1950	0.4766	0.4983	0.2272	-0.0653
どちらかといえば、物事を良い方に考える方です	0.3962	0.0284	0.4903	0.2581	-0.0746
社会奉仕など何か役に立ちたい	0.1620	0.1973	0.1622	0.7140	-0.0500
興味や娯楽を生活の中に取り入れたい	0.1082	0.0602	0.0777	0.6998	0.0265
教養を高めるよう努めたい	0.2134	0.2770	0.0416	0.5226	0.0930
からだの状態がよい	0.1362	0.3418	0.1431	0.4722	-0.0534
年をとっていることが気になる	0.0238	0.0243	-0.0589	0.0305	0.7018
若い人がうらやましい	-0.0757	-0.0350	0.1148	-0.0470	0.6800
因子負荷量の2乗和	2.2692	2.1979	1.9904	1.9698	1.1685
因子の寄与率 (%)	12.4965	11.7548	10.9656	10.5476	6.8765
累積寄与率 (%)	12.4965	24.2513	35.2169	45.7645	52.6410

(2) 主観的幸福感の地域差

主観的幸福感の5因子に関する地域の差異について検討するため、それぞれの因子について、両地域ごとに因子得点の平均値を用いてt検定を行った。

検定の結果、Fig. 2に示すように、この二つの地域間に「前向き志向」因子にのみ有意差が認められた (t=7.673, df=611, p<0.01)。つまり、内陸部の嘉峪関市より沿海部の深圳市の高齢者のほうが前向きに将来を捉えていると考えられる。

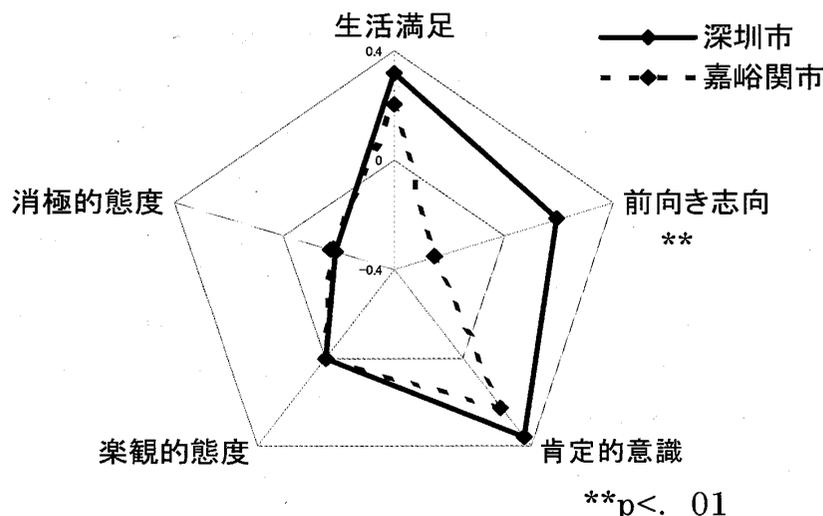


Fig. 2 主観的幸福感における地域差

(3) 主観的幸福感の年齢差及び性差

社会意識に関する研究においては、その影響性の観点から、年齢と性についての分析は一般的な方法として用いられる。

高齢者の主観的幸福感に関して年齢差及び性差について検討した。それぞれの因子において「年齢×性」の2要因の分散分析を行った。分析においては、年齢を前期高齢(60~75歳)と後期高齢(75歳以上)の2群に分けた。Table 3はその結果である(表にはF値を示す)。年齢と性において有意差がみられたのは「楽観的態度」因子においてのみであった。

Table 3 及び Fig. 3 に示すように、年齢差においては前期高齢期より後期高齢期の方が精神状態が楽観的であり、また、性差に関しては、年齢段階の前期・後期ともに、男性より女性の方が精神状態が楽観的であることが認められた。

Table 3 主観的幸福感5因子に対する年齢差及び性差の分散分析の結果

要 因	d f	生活満足	肯定的意識	楽観的態度	前向き志向	消極的態度
年 齢	(1,611)	0.019	2.065	5.035*	1.786	1.965
性 別	(1,611)	2.095	1.087	8.246**	2.043	0.047
年齢×性別	(1,611)	2.936	2.600	4.231*	2.876	1.028

**p<.01 *p<.05

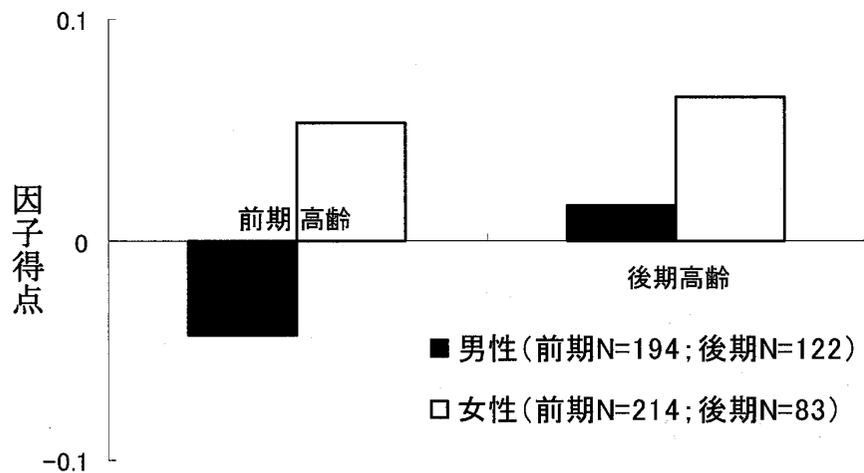


Fig. 3 「楽観的態度」と年齢差・性差

精神状態において、前期高齢者よりも後期高齢者の方が楽観的であるという結果からみると、後期高齢者の場合は自分の「老い」を受け入れる作業が進んでいるからと理解することができよう。一方、前期高齢者の場合は、まだ「老い」を十分に受け入れられる段階に達していないのではないかと考えられる。いわば、自分の身体的及び精神の衰えを容認できずにやや混乱した状態にあるともいえる。人生には各発達段階に発達課題が求められているが、高齢期になると、「老い」を自らの生涯発達の課題と位置づけることが求められているのである。

主観的幸福感に及ぼす要因としての性差については、従来からいくつかの研究が報告されている。Liang & Warfel (1983) においては、「モラル」及び「満足度」について顕著な性差を見出していない。米国においては主観的幸福感に性差を見出さなかったが、本研究においては高齢者のモラルの程度に性差が顕著であることが認められた。民主主義の長い歴史の中で、男女共同参画の価値観が浸透してきている米国社会に生活している女性に比べ、「男尊女

卑」的な環境に生活を続けた中国の女性の高齢者の方が比較的忍耐力が旺盛となっており、さまざまな困難を乗り越えるような力、いわばその社会における適応力ともいえるような特性が醸成されていると解釈することもできる。

(4) 主観的幸福感とその他の要因

主観的幸福感と他の関連要因との関係について明らかにするために、5つの因子（因子得点）と配偶者の有無、子どもとの同居状況、健康度、経済的安定度、従来職業、現在の就業状況、社会参加活動、老人感覚、宗教の有無、趣味の有無、今後への不安、の11の項目について相関分析を行った。Table 4はその結果である。

1) 健康状態に関しては、「非常に健康」が40.4%、「どちらかといえば健康」が44.4%「どちらかといえば健康でない」が9.6%、「全く健康でない」が5.6%であった。

2) 経済的安定度に関しては、「上」が10.1%、「中」が74.2%、「下」が15.7%であった。

3) 元の職業に関しては、40.1%が公務員、34.4%が職員、12.1%がであった。

4) 現在の就業に関しては、「ない」が83.9%で、「ある」が6.9%であった。

5) 社会参加に関しては、「非常に参加」が47.9%、「どちらかといえば参加」が32.9%、「どちらかといえば参加しない」が10.4%、「全く参加しない」が8.8%であった。

6) 老人感覚に関しては、「老人と思う」が53.4%、「老人と思わない」が39.4%であった。進藤（2001）は、高齢者が自己概念を捉える上で、「自分は年寄りになった」、「自分は老いた」といった自覚のあり方を知ることの大切さを指摘している。また、守屋（1994）は日本の高齢者の8割が老人感覚を自覚し、2割弱が老人感覚を持たないと報告している。今回の中国における高齢者は、老人感覚（老人感覚なし：4割弱）が高くないことが特徴となっている。

7) 宗教の有無に関しては、「ない」が71.5%、「ある」が18.6%であった。

8) 趣味に関しては、「ない」が43.8%、「ある」が47.7%であった。

9) 今後への不安に関しては、「非常に不安」が19.8%、「どちらかといえば不安」が21.1%、「あまり不安でない」が42.4%、「全く不安でない」が16.7%であった。不安に関しては耐性や感受性において個人差が存在することは当然であるが、今日の中国に高齢者が国家政策として会福祉制度において安心して生活できる環境の一層の整備を求めていることが不安の原因となっていることが考えられる³⁾。

Table 4 主観的幸福感とその関連要因の単相関係数と無相関の検定結果 N=613

	生活満足	肯定的意識	楽観的態度	前向き志向	消極的態度
健康度	0.20901**	0.19795**	-0.02803	0.09085	0.05834
配偶者	0.06128	0.09957	0.06194	0.36259**	-0.02309
同居状況	0.09614	0.44115**	0.09601	0.33735**	-0.01799
暮らし向き	0.37200**	0.02380	0.46845*	0.09845	-0.00788
職業	-0.03038	0.09266	0.05638	0.04635	-0.06617
仕事	-0.06334	0.06582	-0.10255	-0.09057	0.03196
社会活動	0.16952*	0.09786	-0.03508	0.30631**	0.09878
老人感覚	0.10604	-0.01960	-0.05473	0.18040*	-0.06252
宗教	0.04642	0.16876*	0.01918	-0.04706	-0.06667
趣味	0.23343**	0.15279*	0.18615*	0.13391	-0.00568
今後不安感	-0.26709**	-0.25762**	0.07178	-0.05707	0.03486

$p < 0.01^{**}$ $p < 0.05^{*}$

Table 4 より、①「生活満足」と健康度、経済的安定度、社会的参加活動、趣味の有無、今後の不安、②「肯定的意識」と健康度、子どもとの同居状況、宗教の有無、趣味の有無、今後の不安、③「楽観的態度」と経済的安定度、趣味の有無、④「前向き志向」と配偶者の有無、子どもとの同居状況、社会参加活動、老人感覚、との間には有意な相関関係が認められた。5因子のうち、「生活満足度」と「肯定的意識」及び「前向き志向」、「楽観的態度」と各要因との間には上のような関連性がみられたが、「消極的態度」と各要因との間には顕著な関連は認められなかった。

<生活満足度と関連する要因>

Table 4 に示すとおり、中国の高齢者の「生活満足」と高い関連性を示しているのは経済的安定度であった。つまり、経済的に安定した高齢者ほど生活満足度が高い傾向となっているのである。主観的幸福感に対する経済的要因の影響について、先行研究では、米国及び日本での研究で、高齢者の社会経済的地位と主観的幸福感には正の関連があり、特に、収入の影響が大きく、職業的地位についても関連があることが指摘されている。また、その後も就業している場合に「モラル」が高い傾向がみられるという。しかし、「満足感」との間には顕著な関連は認められていない。本研究においては、元の職業と現在の就業に関しては関連性が認められなかったが、経済的安定度との間には明確な関連性が見出された。この面で従来の研究の結果を支持するものであった。

「今後の不安」と生活満足度との間には負の関連があることが認められた。つまり、今後の生活について不安をもつ高齢者ほど生活満足度は低くなっている。人間は、誰しも時には孤独や不安を感じるものであり、それらが日常生活に負の影響を及ぼすことは容易に予測できる。高齢期における孤独と将来的な不安に関しては、これまでも様々な面から多くの研究が報告されている（野口ら、1989；見目、1997）。

「趣味の有無」と生活満足度との間にも相関が認められた。何らかの趣味をもつ高齢者の方が生活満足度が高い傾向が認められたのである。

「健康状態」と生活満足との間にも明確な関連性が認められた。健康な老人に生活満足度が高い傾向があるということである。高齢者の幸福感と健康状態との関連性については、多くの研究が報告されている。古谷野（1984）が指摘するように、健康が高齢者の幸福感についての大きな要因であることが示されてきた。本研究も同様の結果となっている。

「社会参加」と生活満足度との間にも正の関連が認められた。つまり、社会参加活動が旺盛である人の方が満足度が高いという傾向である。従来の他の国における研究においても同様の結果であった（Snow & Crapo, 1982；古谷野, 1989）。したがって、社会参加活動は高齢者の幸福感に極めて高い関連性をもつことが示唆される。また、高齢者の社会参加活動が個個人にとって満足的で有益であるということは、社会に適応的な高齢者が増えることであり、社会にとっても望ましいことである。中国を含め世界ではますます高齢化が進展してくることが予測される。こうした傾向が進めば進むほど、高齢者の社会参加を促進し、地域活動への積極的な参加により、高齢者の生きがいを探求することが求められる。

<肯定的意識と関連する要因>

Table 4 に示したとおり、高齢者の肯定的自己意識と強い関連性がみられるのは子どもとの同居状況である。子どもと同居している高齢者の自己意識がより肯定的であることが明らかにされた。Larson（1978）は、主観的幸福感に関する米国での研究を分析し、家族構成と幸福感の関連性について整理を行っている。同様に、藤田ら（1989）は、家族構成と「満足感」

との関係について検討し、多世代家族の場合に「満足度」が高く、1人暮らしの場合はあまり満足していないという本研究と同様の結果を見出している。

産業化の進展に従い、権威主義的なタテ社会から平等主義的なヨコ社会への移動をもたらすことになった。このような社会では、家族意識や家族行動などの面においてさまざまな変化が生じることが多い。中国においても例外ではなく、産業化や近代化は労働者や産業従事者の立場や意義を尊重する考え方を強調し、家族における弱者、とりわけ老人の地位を低下させる結果へと方向づけられている。今日では、中国の現代化も飛躍的な進展を遂げ、農業立国から工業立国への過程を着実に歩んでいる。従来のような農業社会においては家族が生産の単位を構成しており、高齢者の地位の低下や存在価値の希薄化が指摘される場所である。しかし、そうした変化も日本ほど顕著な傾向とはなっていない。

費孝通(1991)は、高齢者扶養と家族類型について2類型を示し、中国の養老に関する特色を浮彫りにさせている。中国では、最初は親が子どもを養育し、やがて親が高齢期となると、子どもが親を扶養するのは義務と考えられている。欧米では、一組の夫婦を中心として家族が存在するため核家族が中心となっている。中国では、核家族であっても3世代で住んで親達を同居扶養する直系家族に移行する可能性を持っている。費孝通は中国のように一組の親子間で養育・扶養の関係のバランスがとれているのを「フィードバック型」、欧米のように親に扶養された子どもは次の世代の子どもを養育するというスタイルを「リレー型」と名づけている。親子関係など家族構成員間の在り方を規定するものとして、中国では儒教が大きく影響してきたといわれる。儒教思想の根幹は親への孝行が最も大切なことであり、高齢者は子供と住むことにより親としての存在感を抱き、肯定的自己意識が高められていると考えられている。肯定的自己意識に影響する要因として、2番目に、今後への不安、健康状態、趣味の有無などとの関連性がみられる。つまり、健康な高齢者、不安が少ない高齢者、趣味をもつ高齢者に肯定的な自己意識をもつ者が多いという結果であった。

「宗教」と肯定的自己認識との間にも有意な関連性があることも認められた($R=0.16876$)。宗教をもたない高齢者よりも宗教を深く信仰している者の方が自己肯定意識が高いという結果であった。宗教は我々の日常生活に多様な形で関わっており、洋の東西を問わず、宗教と幸福との間には密接な関係があると信じられている。中国の高齢者の場合も同様の傾向がみられることが明らかにされた。多様な価値観の存在する現代社会においては、核家族化、家族機能の低下、不安やストレスの増大、といった不安定な生活を強いられることになり、宗教に救いを求める高齢者も増えていると考えられる。今後の研究が待たれるところである。

<楽観的態度と関連する要因>

楽観的態度は経済的安定度と強く関連していることが認められた。また、趣味との間の関連性も認められた。経済的に安定している高齢者の方が精神状態は楽観的であること、また、趣味をもつ高齢者の方が楽観的であることが明らかになった。

<前向き志向と関連する要因>

前向き志向は家族構成との間に強い関連性がみられた。また、社会参加との間にも正の相関があり、老人感覚との間にも関連性が見出された。配偶者がある高齢者及び子どもと同居している者が前向きであり、社会参加の頻度が高い者が前向きであることが認められた。

<消極的態度と関連する要因>

老いへの消極的態度の場合には、上の各要因との間に関連性を見出すことはできなかった。こうした態度は誰しもが示すものであり、このこと自体が各要因に影響を及ぼしているかどうか

かを明らかにすることはこのような手続きでは困難であるのかもしれない。老いに対する態度のもたらす影響については今後の課題としてする必要があると考られる。

4. 結論

本稿においては、中国甘肅省嘉峪関市及び広東省深圳市に住む高齢者を対象として幸福感とその要因について検討した。主観的幸福感の因子構造を明らかにし、この結果に基づき、種々の分析及び検定をおこなった。こうした手続きにより、主観的幸福感の地域差、主観的幸福感と年齢、性差及び健康、家族構成、経済的要因、社会参加活動、宗教観、趣味、今後への不安などとの関係について考察した。

(1) 中国における高齢者の主観的幸福感

中国の高齢者の主観的幸福感についての因子分析から、彼らの日常生活において「満足度」及び「肯定的自己意識」は大きな要因であることが明らかにされた。また、幸福感の5因子に関して地域差について検討した結果、内陸部嘉峪関市の高齢者より沿海部深圳市の方が前向きであることも認められた。しかし、生活満足度と肯定的自己意識においては両地域ともに因子負荷量が高く、老いへの消極的態度においてはともに低いという結果であった。こうした結果を総括すると、中国の高齢者は人生に対して積極的態度を有し、老いに対しても適応性は高い傾向あることが示唆される。

(2) 主観的幸福感と発達差・性差

一般的に高齢になると心身の機能は次第に低下し、生活のさまざまな面で他者からの援助が求められるようになってくる。本研究においても、主観的幸福感の中で「楽観的態度」に関して年齢差と性差が認められた。つまり、高齢期への入り口にあると考えられる初期高齢者ほど高齢者感覚に対する抵抗が大きいようであり、そうした自覚が乏しく、楽観的に人生を捉えることが困難となっているようである。また、性差に関しては、初期、後期高齢期を通して女性の方が楽観的であることが示されている。

(3) 主観的幸福感の要因

高齢者の主観的幸福感には種々の要因が影響を及ぼしていることが明らかにされた。それらの中で、家族構成、経済的安定度、健康度、社会参加活動、不安感などは大きい要因となっており、その他、宗教の有無、趣味の有無、老人感覚といった要因も関与していることが認められた。また、主観的幸福感を構成する因子の中でも、各要因に対する影響性は同等ではなく、それぞれが異なった影響力をもつことが示唆された。つまり、「生活満足」と「肯定的意識」及び「前向き志向」などの因子に関しては上のような要因が影響を及ぼしやすく、「消極的態度」の因子に対してはそれほど大きな影響は認められていない。

(4) 主観的幸福感に及ぼす家族への帰属感

現代はストレス社会ともいわれている。幸福感に影響を及ぼす要因としての心理的ストレスは、恐らく洋の東西を問わず、世界的な規模で人間社会が適切に対処すべき課題となってくると考えられる。子どもや青年・働く人々のストレスのみならず、特に高齢者のストレスの問題は大きくなる傾向にある(堂野、1999)。また、従来から、高齢者のストレスとして孤独と家族の在り方が指摘されている(Lynch, J.J., 1977)。

高齢者の主観的幸福感と配偶者の有無及び子どもとの同居別居との関係について検討したところ、配偶者が有る場合に、主観的幸福感の「前向き志向」の傾向が高く、また子どもと同居している場合に高齢者の主観的幸福感の「肯定的意識」及び「前向き志向」の傾向が高いこと

も示された。こうした傾向を総括すると、中国における高齢者の主観的幸福感においては家族や家族関係に対する帰属感は度が大きく影響していることが示唆される。

中国における高齢者の主観的幸福感に家族や家族関係に対する帰属の程度が高いということの背景には、中国の歴史において永年中核的な影響をもたらしてきた「儒教」がいう敬老精神が大きく関与していることは推測に難くない。中国の高齢者におけるこうした傾向から今後における高齢化社会に対して指針・方向性を考察すると、新しい時代における高齢者の生活の質(QOL)を高めるためには、社会保障制度の確立や社会福祉サービスの整備はもちろんであるが、同時に儒教精神に包含される倫理・道徳観を生かした社会的サービスを充実させていくことが重要であることが示唆される。

今回得られた成果は、現代の高齢化社会における主観的幸福感に関して幾つかの考慮すべき実態を如実に示すものである。しかしながら、今後の研究を進める上での重大な課題が示唆される面も多い。13億人もの人々が生活し、広大な面積をもつ中国の、ある面ではほんの一端のみ示すものに過ぎないかもしれない。対象の地域性、社会的条件(制度、文化、習慣など)、幸福感の概念、などを考慮した研究の展開が期待されるところである。

注

- 1) 「中華人民共和国老年人權益保障法」(1996)に基づく、中国における高齢者は60歳以上として取り扱われている。したがって、本研究での対象も60歳以上とした。
- 2) 統計解析においては、いずれも HALWIN (Version-6) を用いた。
- 3) 1996年に「中華人民共和国老年人權益保障法」が成立し、同年10月から施行されることになった。この法律が制定される以前には、1982年憲法で「成人子女は父母を扶養・扶助する義務を負う」「老人に対する虐待を禁止する」と規定され、1980年の婚姻法で「子女は父母に対し扶養の義務を負う」と謳い、1979年の刑法で「老人、年少者病者またはその他の独立して生活を営む能力を持たない者に対して扶養の義務を負いながら扶養を拒否し情状の悪質なものは5年以下の有期懲役、拘留または管制に処する」と規定しているにとどまっている。本法においては、老人に対する社会的な保障の方針については制定しているが、具体的な措置等については規定されていない。

参考文献

- 浅野仁・谷口和江 1981 老人ホーム入所者のモラルとその要因分析 社会老年学 東京都老人総合研究所, No.14, 36-48
- 堂野佐俊 1999 現代社会におけるストレスと適応の生涯発達心理学 風間書房
- 堂野佐俊・堂野恵子 2000 発達理解の心理学 ブレーン出版
- 古谷野亘 1989 主観的幸福感の測定と要因分析 社会老年学 東京大学出版会 No. 20 59-64
- 古谷野亘・柴田博 1984 幸福な老いの指標とその関連要因 老年社会科学 日本老年社会科学会, 6, 2, 187-195
- 井上勝也 2003 老人の心理と援助 メヂカルフレンド社
- 費孝通著・横山廣子(訳) 1958 生育制度—中国の家族と社会 東京大学出版会
- 「金口木説」欄 (2003年9月18) 『琉球新報』朝刊

- 藤田利治・大塚俊男・谷口幸一 1989 老人の主観的幸福感とその関連要因 社会老年学 東京大学出版会 No. 29, 75 - 85
- Larson, R. 1978 Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans *J. Gerontology*, 33, 109-125
- Lawton, M.P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale *J. Gerontology*, 37, 100-108.
- Liang, J. & Warfel, B.L. 1983 Urbanism and life satisfaction among the aged *J. Gerontology*, 38, 97-106
- Lynch, J.J. 1977 *The Broken Heart: The medical conferences of Loneliness* Basic Books (堂野佐俊 (編訳) 1985 現代人の愛と孤独：心臓(こころ)の医学心理学 北大路書房)
- 森二三男 1992 北守昭「高齢者のQOLに関する研究—メンタル・ヘルス・ケアを中心に—」高齢者問題研究 No. 8, 11 - 18
- 守屋国光 1994 老年期の自我発達心理学研究 風間書房
- 見日洋子 1997 「生活福祉」を実現する市場創造 中央経済社
- 野口裕二・前田大作・玉野和志・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liang 1989 高齢者の飲酒と孤立感 社会老年学 東京大学出版会 No. 30, 17 - 21
- Neugarten, B.L., Havighurst R., & Tobin, S. 1961 The measurement of life satisfaction *J. Gerontology*, No. 16, 134-143
- 関根薫 2000 高齢者の「生活の質」に関する一考察—主観的幸福感の要因分析を中心に— 皇學館大学社会福祉学部紀要, 3, 83-92
- Snow, R. & Crapo, L. 1982 Emotional bonded-ness, subjective well-being, and health in elderly medical patients *J. Gerontology*, 37, 609-615
- 進藤貴子 2001 高齢者の心理 一橋出版 75
- 横山博子 1987 主観的幸福感の多次元性と活動の関係について 社会老年学 東京大学出版会, 26, 76 - 88
- 高橋勇悦・和田修一 2001 生きがいの社会学 弘文堂 150-151
- 谷口和江・前田大作・浅野仁・西下彰俊 1984 高齢者のモラルにみられた性差とその要因分析 社会老年学, 20, 46-58
- 和田修一 2001 生きがい問題を論じる視点 生きがいの社会学—高齢社会における幸福は何か— 弘文堂